

保育者研修において附属幼稚園が果たす役割

—幼児教育未来研究会を通して—

無藤 隆* 岩立京子** 倉持清美***

西坂小百合**** 森下葉子***** 青木聡子*****

大学附属学校が、公立・私立の教員の資質の向上に、いかなる形で貢献しうるかを検討した。具体的には、「幼児教育未来研究会」を設立し、お茶の水女子大学の子ども発達教育研究センターを中心とした大学教員と附属幼稚園、また東京学芸大学幼児教育学科および教育課程カリキュラム開発センターを中心とした大学教員と附属幼稚園が連携し、月に1度2時間程度の、公立・私立の幼稚園・保育園の保育者やその養成課程の教員、さらに大学院生などを対象に研修活動を平成15年から開始した。各回の研究会の内容を、ディスカッションも含めて記録した。また、各回の研究会後にアンケートを採り、参加者の属性、研究会の満足度、改善点などについて尋ねた。アンケート結果から、全体として幼稚園に所属する参加者が多く、保育園関係者は少ないことがわかった。参加者の満足度は、各回とも高く、その中でも特に満足度が高かったのが「絵本の魅力」をテーマとした研究会であった。実践事例を主軸において、それらの共有化からスタートすることが参加者の満足度をより高めることにつながるのだろう。今後は、運営側と参加者との協同的取り組みをよりいっそう推進していきながら、参加者一人一人にとって意味ある研修、また、共同研究のあり方を探っていきたい。そして、教員の資質の向上に役立つ研修を提供していきたい。

I 問題

国立大学附属学校はいかなる形で社会的貢献を可能にしていくべきか。とりわけ、公立・私立の教員の資質の向上に役立つべきか。その実践の事例を通しての提案を行いたい。

1. 附属学校・幼稚園の役割とは何か

改めて、附属学校・幼稚園の役割というものを整理しておきたい。

①大学教育への一層の貢献。

単に教職課程の教育実習以外にも協力関係が広がっている。「観察実習」を教職課程の一部としてまた別なものとして行う。「インターンシップ」として授業の指導以外の例えば困難を抱えた子どもへの個別の関わり等を行う場として附属が機能する。附属学校の教師が大学の教職課程の講師となる。附属を使った大学の授

業を行う。

②大学との連携等による研究。

附属学校が大学との連携による研究を行う、また大学での基礎的な研究の場を提供する。保育実践の公開に向けての助言者として大学教員が働く。実践研究を共に進める。

③実践的資料の作成と提供。

カリキュラムや教材・指導法等について、自らの実践を基礎として資料を提供する。

④外部への研修機会の提供。

公開保育を年に数回行う。定期的な研修機会を例えば月に1回など提供する。園内研修を公開し、少人数であれば、保育・授業とその討論を示していく。講師としての外部の学校等に附属の教員を派遣する。

⑤人材の育成。

公立学校との交換人事を行い、附属での現職としての育成を行う。数週間ないし数か月から1年・2年といった長期にわたる実地研修の場とする。

キーワード：保育者研修 大学附属幼稚園 幼児教育 教員の資質向上

* お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター ** 東京学芸大学 *** 東京学芸大学

**** 東京学芸大学連合大学院 ***** 東京学芸大学連合大学院

2. 附属と大学の研究面での連携の問題点

研究面ではとりわけ附属学校は大学の教員との連携が強調される。研修にしても大学の教員のバックアップが必要なはずである。そうであってこそ、自治体の研修・教育センターとの違いが明確になる。だが、実際にはうまく機能しているとは言い難い。

①連携関係が表面的に終わりやすい。

大学の教員の多くは教育実践現場への関心が薄い。また、基礎志向である多くの大学教員と教育実践の直接的な改善を目指す附属教員の間で共通の関心の研究テーマが見つかりにくい。データ収集や文献の検討等において研究の方法論がかなり異なる。

②附属の教員の研究者としての位置づけが足りない。

附属学校の教員には研究時間や研究費が乏しい。それに見合って、研究者としての自覚が乏しい。さらに、論文を書くことが評価されない。

③大学の研究者の論文となりにくい。

附属学校との連携による、特に実践的な研究は、大学教員側にとっては学会誌論文としてまとまりにくい。それはつまり、多くの学界で評価されるタイプの研究になりにくい。また、実践的な研究を大学内で評価する慣行が確立していない。

④連携のための組織が弱い。

ほとんどの大学では研究や研修のための連携を担う組織がないか、実質的に機能していない。そのため、連携の推進が個別の教員の熱意に依存する。多くの教員にとってはまた大学の報告上も連携を形だけ組んでよしとする傾向が強い。

3. 附属学校の研修機関としてのあり方の問題点

研究面との連動しつつ、附属学校が研修としての場として十分に機能していない現実がある。

①地域の実質的な研修の中心となっていない。

年間の利用人数が少ない。人数の多寡は決定的なことではないとしても、人数が少なれば地域社会で実質的に影響力を持たないことになる。公開の回数でぐくわずかで、しかもイベントとしてどこまで参加者が学んでいるかの検討がされていない。普段の時期から繰り返し行われていない。公立・私立との連携が弱いことが多く、学校・園とのつながりが見られない。

②研修の中身が充実していない。

大学教員が本格的に研修のための実践案やカリキュラム案の作成の準備の過程から関与することが少ない。公開の助言もおおざなりになりやすい。実践のよい点、工夫点、改善すべき点等を取り出していることは少な

い。また、公立学校の教員から見れば、公立学校等で現在抱えている問題に参考にならない。直接に模倣出来ることでなくても、何か示唆や展望を与えてほしいという要望は多い。

③教員の指導力の改善に十分には役立っていない。

授業・保育の改善やカリキュラムの改訂の過程を示していないので、表面的な理解にとどまりやすい。また参加者にとって見学・受講にとどまっていたり、指導力の改善に踏み込んでいない。参加型でないために、それが難しい。また、研修の時間が短く、身に付くほどのことにならない。

④公立の水準の向上と改革の速度に追いついていない。

おそらく、この20年ほどでかなり公立学校の教師の平均的な水準が上がったのではないだろうか。逆に、附属学校では、名人的技能の教員がいなくなりつつあり、名人芸を見せるという以外の研修を工夫せざるを得なくなっている。特に近年、研究開発学校や教育特区等による公立学校の改革が進み、むしろ、附属学校が旧態を保持しているとさえ見えてきている。

4. 附属と大学、附属間、さらに附属と公立との連携として取り組む

具体的に、「幼児教育未来研究会」を設立して、お茶の水女子大学の子ども発達教育研究センターを中心とした大学教員と附属幼稚園、また東京学芸大学の教育課程カリキュラム開発センターおよび幼児教育学科を中心とした大学教員と附属幼稚園が連携し、月に1度、2時間程度であるが、公立・私立の幼稚園・保育園の保育者やその養成課程の教員、さらに大学院生などを対象に研修活動を平成15年度から開始した。これは、上記の問題点の一部に過ぎないが、それを少しでも改善し、附属学校の役割を果たしていくための試みである。研修の実践であると同時に、それを大学の附属学校の研修のあり方の一つのモデルとしたい。特に、以下のことに留意した。

- ・大学教員と附属教員の対等の共同を基本とする。
- ・附属間の連携を通して地域への影響力・貢献を拡大する。
- ・公立幼稚園との連携を行う。特に、文京区や東京都の公立幼稚園の指導レベルの教員と連携する。
- ・時宜を得たテーマを出来る限り選ぶ。そのためにふさわしい講師を選定する。
- ・実践研究をもとにした講演と実践事例とを組み合わせ、公立学校の研修よりも理論的・研究的な水準

を上げていく。同時に、実践例を通してすぐにでも使えるヒントを提供する。

- ・アンケートその他の情報による改善を図っていく。研究会の中心メンバーが大学院生の手助けを得ながら、参加者の声を聴き取り、改善を進めていく。
- ・大部分がボランティアとして働きながら、最小限の資料代を得つつ、運営を自立させていく。

II 幼児教育未来研究会の内容の報告

幼児教育未来研究会が発足した平成15年度は、8回の定例研究会と学校の夏季休業中に1回のスペシャル研究会を行った。定例研究会は、夏季休業中を除いてほぼ毎月1回、土曜日の午前中に行われた。平成15年度の開催時間、テーマ、研究会の進め方については、研究会の運営委員が話し合って決定した。テーマについては教育の今日的課題や不易の課題を考慮し、実践的関心の高いテーマが選ばれた。ここでは、夏季休業中のスペシャル研究会を除く8回の研究会の内容について、事例提供、助言、ディスカッションの側面から報告する。

第1回「子どもとことば」(2003年4月19日)

助言：内田伸子(お茶の水女子大学)

事例提供：伊集院理子

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

会場：お茶の水女子大学附属幼稚園

はじめに事例提供者によって、3歳児の記録から3つの事例が紹介され、子どもたちが人との関わりのなかで実体験を通して「ことば」を獲得していくこと、また周囲との関わりを広げていくなかで、その「ことば」が自分の気持ちを伝える重要な役割を果たしていることについて考察が行われた。

これらの報告を受けて助言者からは、①「保育をみる」という言葉には「診る」と「観る」の二つの役割があるということ、②子どもの学びは一見無駄に見えるような過程を経て学習していくという特質をもつこと、③子どもの自律性の育ちの支援においては保育者の柔軟性及び子どもの発達の最近接領域への働きかけが基本原則であること、④支援の際の保育者の役割は「足場作り」であり、「待つ」ことが重要であること、⑤子どもの自律性を育む保育者のことばかけのあり方などについて理論的観点から説明が行われた。その後、

事例のひとつ一つについて、自らの観察記録を提示したり、幼児のことばに関する研究からの事例を引用したりしながらコメントがなされた。議論の時間には、参加者から、事例提供者による事例についてより詳細な説明が求められたため、事例提供者に代わって事例の場に居合わせていたT.Tによって状況の説明がなされた。

第2回「絵本の魅力」(2003年5月10日)

助言：秋田喜代美(東京大学)

事例提供：堂本真実子(元駒場幼稚園非常勤教諭)

会場：お茶の水女子大学附属幼稚園

はじめに事例提供者から、自らが幼稚園で週2回「本の部屋」の先生としてかかわった経験をもとに、絵本のおもしろさの特徴と「本の部屋」という環境の意味についての考察が行われた。子どもがよく選ぶ絵本からおもしろさの特徴を分類すると、①単純な遊びの構造を骨格として持つ絵本、②日常的な子どもの冒険心と不安を代弁する絵本、③子どもの願い(ひそかな憧れ)を創造の世界で代弁する絵本の3つになることが述べられた。また「本の部屋」に来る子どもの特徴は①少人数の静かな時間を求めてくる、②本を読みに来る、③ひやかしに来る、④調べものに来る、⑤人を探しにくるなど、様々な特徴があることが述べられた。「本の部屋」は、本がたくさんある場所として子どもたちに利用されているだけでなく、隠れ家的雰囲気を持つものとしての機能も果たしていることが報告された。

助言者からは、事例提供者の報告を踏まえ、子どもにおける絵本経験の持つ意味、絵本との出会いを支える環境としての「絵本の先生」「本の部屋」の役割などについて助言が行われた。そのうえで子どもの発達と絵本経験との関係、保育において「絵本という世界」を創ることの重要性などについて、様々な先行研究・事例に触れながら述べるとともに、絵本や絵本に関する書籍の紹介も行われた。

第3回「環境の構成」(2003年6月21日)

助言：齊藤美代子(文京区立第一幼稚園)

事例提供：塚本美起子(文京区立小日向台町幼稚園)

会場：東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎

事例提供者からは、4歳児の4月・5月・6月の3つ事例が紹介された。4月の事例では2年保育児と3年保育児がそれぞれの居場所を見つけ、遊ぶ姿が紹介された。5月・6月の事例では、幼児の活動に添って環境を再構成していく様子や、幼児と一緒に遊びながら環境を構成していく様子が紹介された。これら事例ごとに保育者のねらいと内容、反省・評価が提示された。それらを踏まえ、保育者が幼児ひとり一人の興味・関心、遊び方、友達関係を考慮し、また発達の見通しに基づいて計画的に環境を構成すること、また、予測とは異なる展開になった場合には、幼児が始めた主体的な活動にそって再構成するということが必要であることが考察された。その後、議論の時間が設けられ、参加者から事例についての質問があがり、事例提供者がそれに応えた。

助言者による講話では、①発達の時期、②幼児の興味や欲求、③生活の流れの3つの視点に基づいて環境を構成する必要があることが述べられた。また、環境の再構成については、幼児の興味・関心を重視しながらも、子どもに体験させたい内容を考慮して環境を再構成していくことが大切であり、目の前で展開されている遊びを、その空間や用いられている道具や子どもの姿から捉え直し、遊びの展開を予測していくことが環境構成の重要なポイントになるという示唆がなされた。

第4回「記録のとり方・生かし方」(2003年9月20日)
助言：河邊貴子(立教女学院大学)
事例提供：中野圭祐
(東京学芸大学教育学部附属幼稚園小金井園舎)
会場：東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎

はじめに事例提供者からの報告があり、記録のとり方が「個人記録(1枚/1日)」「個人記録2(1枚/1週間)」「保育マップ(環境図記録)」「個人記録3(対象児を決めてのエピソード記録)」と変化していったことについて、それぞれのメリット・デメリットを含めて語られた。続いて参加者のディスカッションと感想・意見の交流の場がもたれ、その際助言者の提案により、①事例提供者の提案に対しての疑問・感じたこと②参加者は日々の記録をとる際にどんなことに気をつけているのか③参加者は日々の記録をどんな風にとっているのか、という3つの視点で話し合いを進めるよう求められた。

その後助言者から、保育記録において大切な行為(記録を起こす・残す、読み返す、まとめ直す)や記録の生かし方((忘れないための)出来事の記録、他の保育者との情報交換の資料、保育を構想する際の資料)についての助言、保育の記録方法についての提案がなされた。また記録を読み取る際のポイントとして、遊びの課題や友だち関係を捉えて遊びの動機を把握することや子どもの経験を見取ることなどが事例を交えて示された。最後に、保育記録と指導計画の連続性から、記録のとり方や生かし方についてのまとめが行われた。

第5回「教師自身を知る」(2003年10月18日)
講師：伊藤美奈子(慶応義塾大学)
会場：お茶の水女子大学附属幼稚園

はじめに、主な心理テストの分類法と具体例(目的による分類：知能テスト、パーソナリティテスト、適正テスト/深さによる分類：投影法〔無意識レベル〕一質問紙法〔意識レベル〕/手続きによる分類：集団実施、個別実施)が示され、エゴグラムが何を測定するために実施されるのか、心理テストの中でどのように位置づけられているのか、について共通理解を得た。そしてジョハリの窓の概要に触れながら、本時行うTEG(東大式エゴグラム)についての説明を受け、各自が実際にTEGに回答する時間が設けられた。その際「教師としての自分」と「ありのままの自分」について別々に回答するよう課題が出され、2つのプロフィールの比較を行うことで、「教師としての自分」の自己像に迫ることが期待された。また、標準域から出ているのはどの特性か、自分が抱えている自己イメージとは一致しているか、など分析の視点が講師から示された。最後に現場で子どもを対象に心理テストを実施する際の留意点として、心に侵入されるという恐れを与えないためにも、生徒との間に信頼関係を作ってから実施すること、拒否権(参加しないという権利)を認めること、実施後には必ずフィードバックを行うことが必要であると伝えられた。特にフィードバックについては、否定的なことは言わない、「どうすれば自分が楽になるか」をアドバイスする、(本人の自己イメージと比較して)決め付けた言い方をしない、「結果」をひとつのきっかけにして対話につなげるなどの重要なポイントが示された。

第6回「子育て支援」(2003年12月13日)

助言：岩立京子(東京学芸大学)

事例提供：坂本ふみ子(文京区立後楽幼稚園)

会場：お茶の水女子大学附属幼稚園

はじめに事例提供者から、幼稚園において行われている子育て支援活動(地域乳幼児への幼稚園施設開放・在園児との交流、在園児親子交流活動としての園庭・園舎開放、お父さんと遊ぶゲーム、保護者の保育参加、親子での手作り昼食会、子育て情報の発信、高齢者クラブなどとの地域交流活動、子育て相談・子育て講演会、預かり保育など)について事例や写真を提示しながら紹介が行われ、各々の活動の特色や意義が提示された。そして、幼稚園における子育て支援活動は幼稚園の教育活動との関連に配慮することが必要であることが述べられた。これらを踏まえ、子育て支援の充実の一つ一つの活動が相互に関連し、幼稚園の教育課程を踏まえなければならないこと、さらに地域と密着した多世代育成を支援していくことなどが今後の課題としてあげられた。

助言者からはまず、幼稚園における子育て支援をめぐる行政の動きについての話があり、後に事例について活動の内容に関する疑問点、あるいは子育て支援活動と幼稚園における保育目標やカリキュラムとの関連の重要性について指摘がなされた。具体的な疑問点としては子育て相談における臨床心理士の役割について、預かり保育の充実や通常の保育との関連について、未就園児を対象とした保育の構想や在園児のカリキュラムとの関連について、高齢者との交流や父親参加の保育においてはどのような交流の質・活動をねらうのかについてといったことが提示された。参加者はこの問題について検討するように投げかけられ、事例提供者を含めて意見交換が行われた。

第7回「幼稚園・小学校の連携」(2004年1月17日)

助言：無藤隆(お茶の水女子大学)

事例提供：井口眞美

(東京学芸大学教育学部附属幼稚園竹早園舎)

会場：東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎

事例提供者からは幼小連携の経緯、実践にあたっての留意点が示された後、本年度の取り組みについて実践の内容やそこから浮き上がってきた問題やその打開

策などについての説明が行われた。具体的には1学期に幼稚園・小学校各々の保育実践・授業実践をお互いに見合い、どのような研究の方向性について話し合いを行い、園児や小学校1年生の実態に即した研究、教師のニーズに即した研究、かつ幼小連携の意義が見出せる研究を目標にテーマの設定が行われたことが述べられた。子どもの実態に即した教師の関わりのためには、教師の子どもの実態の「見とり」の力量が問われており、これらの関係性を検討するために①子どもの事実、②見とり(解釈)、③教師の意図(ねらい)、④教師の関わりという4つの項目に沿って、対象児を決めて記録をとり、その記録を持ち寄って1学期の子どもの姿を見直すということが2学期に行われ、3学期には今後の連携のあり方についてのまとめを行ったという報告がなされた。

助言者からは幼小連携だけではなく幼保小連携まで視野に入れた行政の動きが紹介され、幼小連携に関しては「なめらかな接続から段階を追った高度化へ」のシフトが必要であるという指摘がなされた。そのためには子ども同士の同年齢・異年齢の交流、教師の間の交流、教育課程をつなげること、幼児教育と小学校教育の区切りを捉えなおすこと、自己の育ちを中核に置きながら個別の学びの芽生えを教科へとつなげていくこと、地域における子育て・教育力を高めることなどが求められていることなどが述べられた。これらの指摘の中で本事例の位置づけについてのコメントがなされ、今後の連携に向けての提案がなされた。

第8回「からだの育ち・心の育ち」(2004年2月28日)

助言：森司朗(東京学芸大学)

事例提供：吉岡晶子(お茶の水女子大学附属幼稚園)

会場：お茶の水女子大学附属幼稚園

はじめに事例提供者から、実践事例とそれに対する教師の思い、「からだ」を意識しての見直しについての報告があり、活動の充実を支えたものについての考察が行われた。また、「からだ」として取り上げて活動に組み込むのではなく、普段の生活・遊びの中で見ていくこと、教師が「からだ」を意識して子どもの様子を捉えること、「からだ」の感覚が豊かに柔軟になるように生活の空間や場・時間の持ち方、道具など環境を工夫して構成していくことが大事であることが実感として語られた。その上で、教師も一緒にからだを使っ

を伸びやかに表現できるからだへ」と育てることになるのではないか、という提案がなされた。

事例提供者と参加者との意見交流の場がもたれた後、助言者からは、事例提供者の報告内容を取り上げながら、最近の幼児の運動能力の現状と原因や運動・身体発達と精神発達、生きる力と運動経験の関連についての説明がなされた。また、「心⇄からだ⇄身体」のつながりから「からだ」の重要性が示され、「からだ」と対人関係的自己や運動遊び場面との関連についても触れられた。

III 幼児教育未来研究会アンケート結果

ここでは、幼児教育未来研究会定例会が開催された4月から翌年2月（第1回から8回まで）のアンケート結果を報告する。各回とも研究会参加時にアンケートが配布され、研究会終了後にその場で記入してもらい、回収した。第6回のみ、アンケートの回収数が非常に少なかったため、集計結果から外している。

1. アンケートの内容

アンケートは、記名式とした。参加者の属性を、「年齢」「保育者経験年数」「所属」の3項目で尋ねた。

質問項目は10項目からなる。そのうち「研究会のことを何で知ったか」と「研究会参加の動機」の2項目は複数選択とした。「研究会の満足度」の1項目は、「満足した」から「満足しない」までの5件法とした。「研究会に参加しての新たな気づきや学び」「明日からの実践に生かせる内容」「今後に望む研究会テーマ」

「今後の改善点」「研究会へのコメント」「これまでに印象に残った研修・研究会の内容」「物足りないと思った内容」の6項目については自由記述とした。

2. 研究会参加人数

研究会の日程、テーマは、先に示した通りである。定例研究会の参加人数の推移は、Figure 1の通りである。第2回「絵本の魅力」の時に、参加人数が最大となった。ついで、第1回「子どもと言葉」第4回「記録の取り方・生かし方」となっている。10月以降の5回目からは、30名代になっている。これは、最初の参加意欲が次第に薄れた結果かもしれない。

3. 参加者の属性

①年齢別動向

各回の年齢別割合を算出したものをFigure 2に示した。20代の参加者と30代の参加者の割合は重なることが多いが、第3回「環境構成」では、20代の割合が多く、30代は最低になっている。30代は第7回「幼稚園・小学校の連携」が最高になっている。40代は、第4回「記録取り方・生かし方」と第5回「教師自身を知る」で他の年代より高くなっている。50代の参加の割合は全体的に高くはないが、第8回「からだの育ち・心の育ち」で、40代とともに高くなっている。

20代は、保育実践にすぐに結びつくようなテーマ、30代は、保育の今日的課題となるテーマに、40代は自分自身の保育を見直すようなテーマに、50代は子どもを取り巻く今日的なテーマに、各々参加する割合が高いといえる。

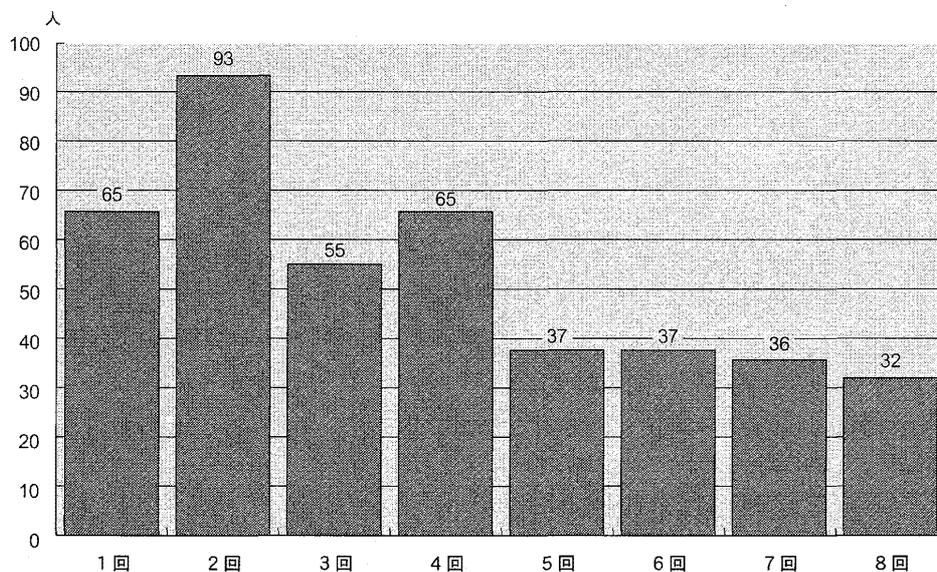


Figure 1. 参加人数の推移

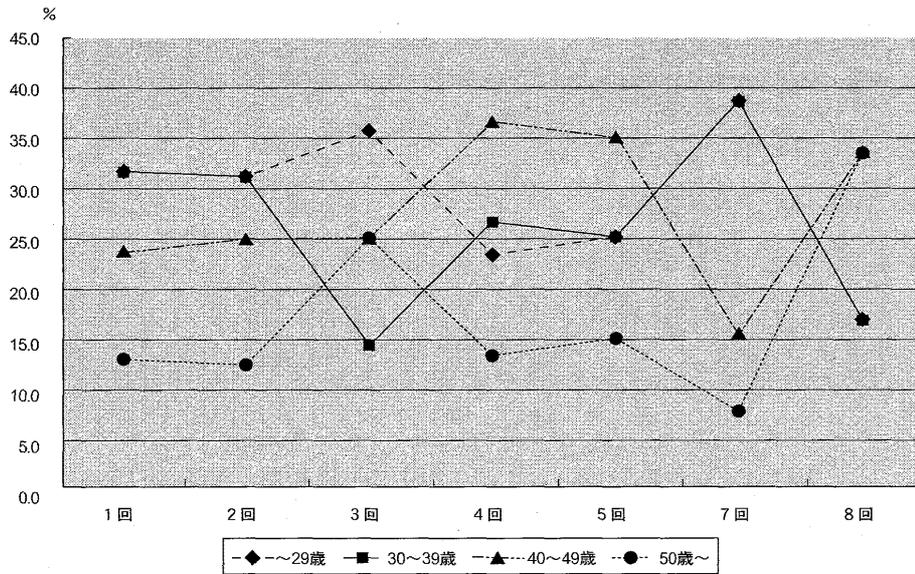


Figure 2. 年齢別動向

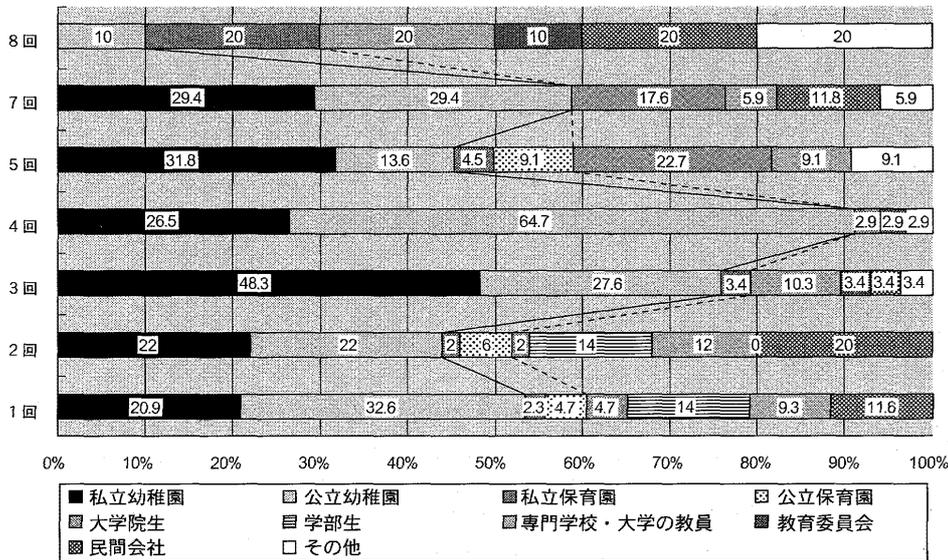


Figure 3. 参加者の所属

②参加者の所属

参加者の所属については、Figure 3に示した通りである。全体的に、幼稚園の所属が多いことがわかる。第4回「記録の取り方・生かし方」では、9割以上が幼稚園の所属であった。第8回「からだの育ち・心の育ち」では、幼稚園以外の所属の割合が高くなっている。また、第3回「環境の構成」では私立幼稚園が、第4回「記録の取り方・生かし方」では、公立幼稚園の割合がおおよそ2倍高くなっている。この相違は公私で抱えている問題の相違を現しているのかもしれない。

保育園関係者が全体として少ない点については、研究会の広報の問題なのか、研究会テーマの問題なのか、

検討が必要だ。

また、第2回「絵本の魅力」と第8回「からだの育ち・心の育ち」は、幼稚園関係者の割合が他回と比べて低かった。第2回は、民間会社の割合も高くなっている。出版社の社員が多く参加していたのは、テーマとの関連からだろう。第8回は、民間会社・専門学校・大学の教員・大学院生・保育園の割合が高くなっていた。すぐに保育実践と結びつくようなテーマではなかったからかもしれない。保育園の参加が多かったのは、子どもの保育時間が長い保育園では子どもの身体の育ちも大きな保育の関心となるためと考えられる。

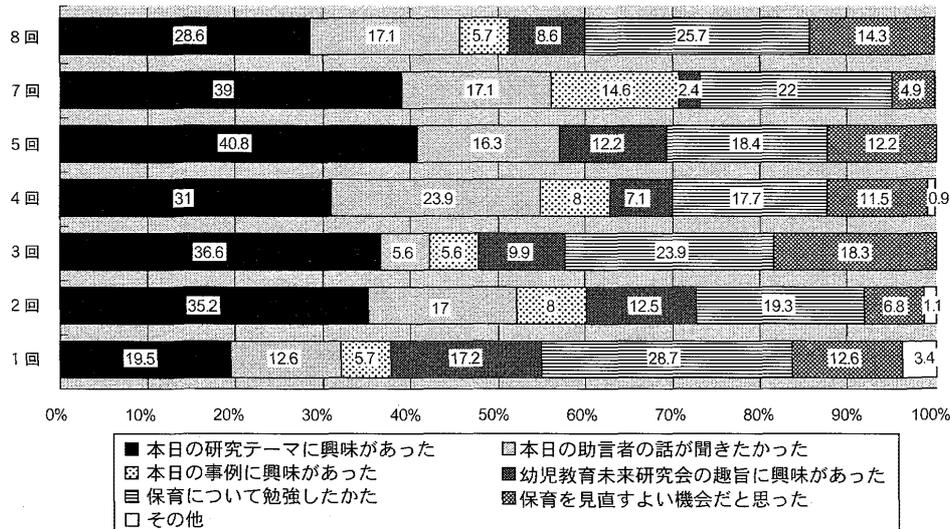


Figure 4. 研究参加の動機

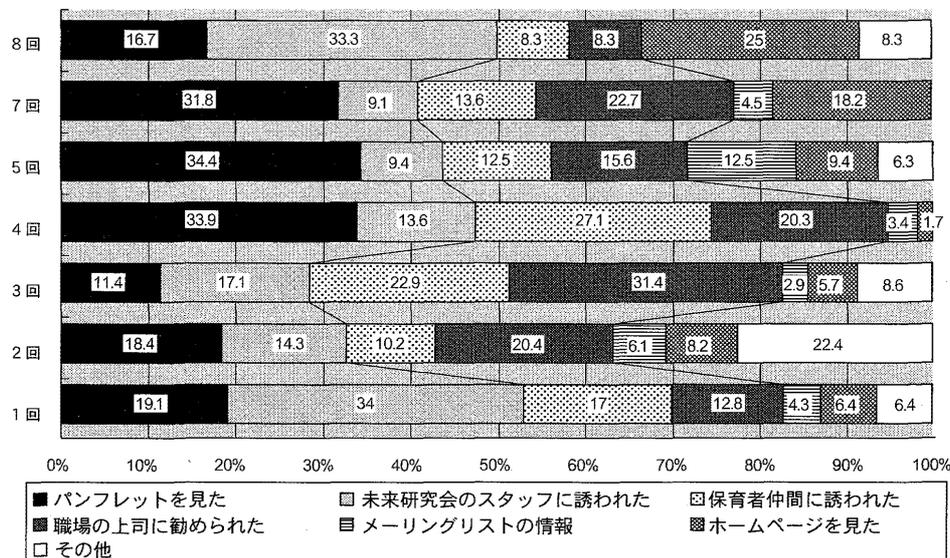


Figure 5. 研究会を何で知ったか

4. 研究会参加の動機

各回の研究参加の動機をFigure 4に示した。第1回は、「保育について勉強したかった」の割合が一番高くなっているが、それ以降は、「本日の研究会テーマに興味があった」の割合が高くなっている。テーマ設定の重要性がわかる。

参加者の多かった第4回「記録の取り方・生かし方」では、テーマに興味があったとする割合とともに、「本日の助言者の話が聞きたかった」とする割合も高かった。

5. 研究会についての情報

研究会についての情報をどこで入手したかについて尋ねた結果をFigure 5に示した。第1回は、未来研のスタッフに誘われたことが参加のきっかけになってい

る割合が高かった。できたばかりの研究会についての情報は、身近な人から得やすいのかもしれない。

第3回「環境の構成」と第4回「記録の取り方・生かし方」は、保育者仲間に誘われたり、職場の上司に勧められて参加する割合が高くなっている。どちらも幼稚園関係が多かった。保育者間で保育の課題として共有しやすいテーマだったため、誘い合いをきっかけに参加することになったのかもしれない。

後半になると、ホームページをみて参加した割合が増加した。情報発信のためにホームページの充実、今後の課題だろう。

6. 研究会の満足度

各回の研究会に対する満足度をFigure 6に示した。全体的に満足度が高いことがわかる。

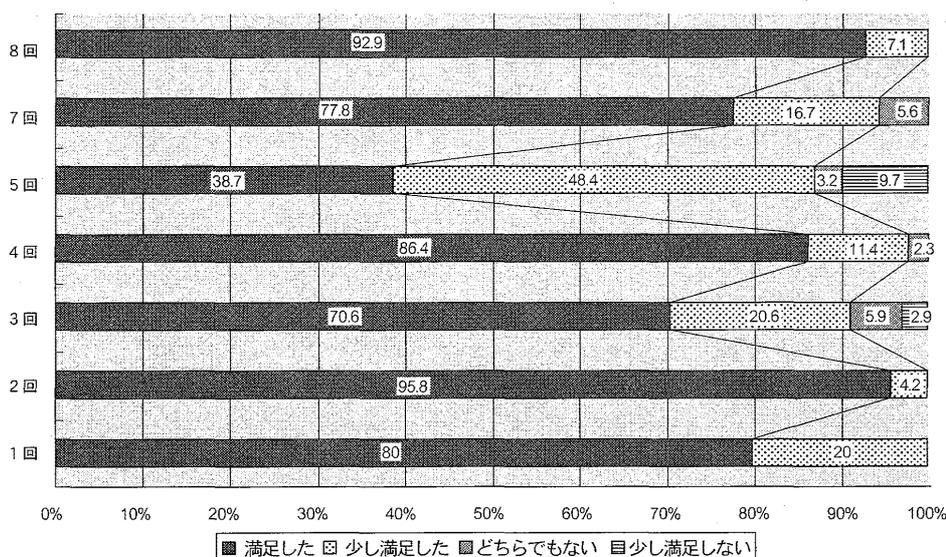


Figure 6. 研究会の満足度

Table 1. 今後のテーマに関する自由記述

親との関わり	現代の母親と子ども 保護者との関わり 子育てについて親の持っている現実の悩みや今の親の姿、その支援
環境構成	落ち着ける保育室の環境について 子どもの学ぶ力、考える力を育てていくための環境
問題を抱える子ども	発達障害児への対応 子どもの攻撃性について 「荒れる」「キレル」子の対応は現場ではどのようにしているのでしょうか
日々の実践に生かせる内容	遊びの読みとり方、具体的な援助の仕方 日々の生かせるものがあります 子どもの理解に関するための具体的な日々の実践に役立つこと 実践に関わるテーマ 実践から学べるものがあれば役立てたい

Table 2. 今後の改善点に関する自由記述

時間配分	事例に対する質疑応答を報告の後すぐに少し時間をとってもらったほうが聞きやすかった（質問だけでいいので）。 とても勉強になり、楽しかったです、もう少し長い時間が欲しかったです。 後30分くらい時間が取れると、もっと参加者との意見交流が深まるかもしれません 助言者の方々のお話、1時間半程度時間を取っていただきたい。
研究会形態	意見が出やすいように、小グループにするなど協議が活発になるとよいと思う。 事例や講師の先生のお話を聞くことも良いが、グループでわかれ、話し合ったり情報を交換したりする機会ももちたい。 学びあう研究会にしていくなら、机なり台がある方が聞き手にゆとりが出てくると思う OHP、スライドの使用ができるとなおよいと思います。 小グループで提言の後の意見交換などをできたら、おもしろいのでは。
内容	もう少し具体的なところを深くお聞きしたいです。ちょっと消化し切れません 現場の視点でもっと討論できるように望む。

第5回「教師自身を知る」では、満足した割合が他の回に比べて低くなっている。講師が保育現場よりは学校現場を専門としていること、研究会の内容が、すぐに実践に役立つという種類のものではなかったことが原因かもしれない。

7. 自由記述から

自由記述の中から、「今後のテーマ」と「今後の改善点」について取り上げる。

① 今後のテーマ

今後のテーマとして、複数みられた意見をピック

アップしてTable 1に掲載する。親との関わりに対するテーマ、環境構成に関するテーマ、問題を抱える子どもに関するテーマ、日々の実践に生かせるテーマが、多かった。

①今後の改善点

今後の研究会の改善点についての複数みられた意見をピックアップしてTable 2に掲載する。

時間配分に関する意見と研究会の形態に関する内容が多かった。その他、研究会の内容についての意見も若干みられた。時間配分や形態については、未来研究会の全体のねらいや、回ごとのテーマと照らして、今後検討していく必要があるだろう。

IV 研究会活動の評価と今後の課題

1. 幼児教育未来研究会設置の主旨と特色

幼児教育未来研究会（以下、未来研究会と略）は幼稚園教師、保育士、発達や教育の研究者・大学院生、教育行政関係者その他幼児教育に関わる様々な者が集い、情報を共有し、意見交換しながら幼児教育の今を見つめ、その将来を考えることを目指して設置された。その運営は一般に見られるような個人一組織によるものではなく、5つの組織、すなわちお茶の水女子大学子ども発達教育研究センター、東京学芸大学幼児教育学科、東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター、お茶の水女子大学附属幼稚園、東京学芸大学附属幼稚園が共同で行うという形をとった。このように未来研究会は、子どもの健やかな発達を願い、幼児教育について真剣に考える様々な立場の者に対して開かれた研究会であり、発達研究や教員養成の大学を含む複数組織の広域ネットワークによる新たな共同設置・運営という形態をとっていることに大きな特色があるといえる。今日の教育や発達にかかわる問題は複雑多岐に渡り、個人や一組織で対処したり、問題解決することが困難である場合が少なくない。未来研究会のような開かれた学びの共同体は今後、益々、必要とされるだろう。

未来研究会はその内容と進め方にも以下のような特色をもつ。まず内容については①幼児教育の領域における不易の課題と今日的課題のなかから特に重要なテーマを教育実践者と研究者が話し合って設定したこと、進め方については②保育実践事例の報告を中心に位置づけたこと、③教育行政の最近の動向、発達や教育研究の知見や理論とを関連させながら実践事例を意味づけたり、解釈しながら問題提起を行うこと、そし

て、④幼児教育に関わる者が様々な立場から議論を行うことである。まず、教育・保育実践者が自らの実践を振り返り、新たな気づきや学びを得るためには、一般的・抽象的な内容からではなく、具体的・個別的な実践事例からスタートする必要がある。なぜなら、実践者の教材(遊びの素材)、指導法、幼児理解などに関する実践的知識は具体的・個別的な実践事例に基づいて構造化されていると考えられるからである。参加者が事例を共有し、多様な視点からそれに解釈・考察を加えることによって、幼児の発達を読み取ったり、幼児の体験や幼児にとっての意味を理解しうるのであり、そういったプロセスを通して、実践的知識が再構造化され、洗練されていくと考えられる。また、実践事例を最近の教育行政の動向や発達・教育研究の知見などの視点から解釈したり、意味づけて問題提起することによって、半ばルーチン化されていた教育実践を振り返ることができるだろう。さらに、事例提供者と講師を発信元とする一方向的コミュニケーションに終わらず、様々な考え方を交し合う双方向的コミュニケーション、さらには参加者同士の多方向的コミュニケーションを実現させることで、共同で知を生成する体験や満足感がより一層得られると思われる。このような研究会への主体的参加を通して、教員の資質は真に向上しうるのだろう。

2. 今年度の未来研究会の評価と今後の課題

参加者による今年度の未来研究会の評価については、アンケート調査の結果から既に述べたように、各回の満足度は非常に高く、「満足した」参加者の比率は38.7%から92.9%で、「少し満足した」人数を含めると87.1%から100%であった。「満足した」参加者の比率は第5回の「教師自身を知る」というテーマの時が比較的低く、第2回の「絵本の魅力」という内容の時が比較的高かった。このような違いが生じた原因を事例提供の有無、幼児教育との直接的関連の2点から考えてみたい。まず、第5回めの研究会では教師自身の問題を取りあげ、今日の教師のバーンアウトや心理学的尺度による心理測定について説明された後、「エゴグラム」という心理尺度を用いて対人交流パターンの特徴をみるという演習が行われた。さらに、「エゴグラム」の結果の解釈と今後の教師・幼児間のかかわりの改善に向けての利用の仕方について講義がなされた。この回は、「保育」や「幼児」に直接に焦点を当てるのではなく、教師自身の自己理解を深めることを通して間接的にそれらに迫ることを目指すものであった。しかし、

事例提供を設けず、一般論としてのバーンアウトや心理学的尺度、対人交流パターンの話から導入されたことから、教師や保育士が自らの実践行為と関連づけるにくく、意味を見出しにくかったのかもしれない。自らを対象化し、日常の具体的・個別的視点ではなく、一般的・抽象的視点で見ることを興味深く感じる者が比較的少なかったといえる。研究者が示す一般的・抽象的知識や理論に実践者が接近することを強いるのではなく、助言者である研究者が事例提供者である実践者の思考に接近することが求められるのだと思う。さらに、助言者が幼児教育分野の専門外の研究者であり、幼児教育の事例との関連について参加者が納得できるほど十分には言及しなかったことが満足度を低下させたのか一因かもしれない。これについては、助言者が講義する理論や心理尺度でみる教師の自己理解（対人交流パターンの理解）と幼児教育の実践事例における教師の自己理解とをつなぐ役割を運営側が果たすべきだったように思う。保育者にとって自己理解がどのような意味で重要なのか、それが保育の実践行為にどのように影響しうるのか、また、教師の適応や力量形成にどのように関わってくるのか、また、どのような対人交流パターンが幼児、親、家族との円滑な関係性形成につながるのかなど、エゴグラムによる自己理解と保育実践との関連を運営側が示したなら、参加者の理解や満足度も高まったのではないだろうか？それに対して、最も満足度の高かった「絵本の魅力」については、保育者による実践事例の提供がなされた後、「子どもにとって絵本との出会いやかかわりがどのような意味をもつのか」、すなわち、日常、保育の素材として扱っている絵本の子どもにとっての意味を再考し、実際に多くの絵本を示しながらそれを通して伝えられる意味を紹介したことによって、保育に直結して「幼児にとっての意味の問い直し」や「素材研究」ができたことが高い満足度につながったと思われる。今後は、やはり、実践事例を主軸において、それらの共有からスタートすることが参加者の満足度をより高めることにつながると考えられる。

アンケートの自由記述欄には、今後取り上げて欲しいテーマとして「親とのかかわり」「子どもの学ぶ力、考える力を育てていくための環境」「発達障害児への対応」「キレル子どもへの対応」「遊びの読み取り方・具体的な援助の仕方」「子どもを理解するために具体的な日々の実践に役立つこと」などがあげられた。いずれも今日的課題として重要なものであるので、今後、このようなテーマを取り上げ、話題提供し、議論してい

くことが必要だろう。また、今後の改善点としては、「事例に対する質疑応答の時間を報告の直後にとってほしい」「助言者の話をもう少し長く聞きたい」「意見が出やすいように小グループでの協議がもちたい」など研究会の進め方についても記述された。これは、この研究会をより意味のあるものにしていきたいという参加者の意欲あるいは自我関与の強さを示すものではないだろうか。平成16年度の研究会の進め方に参加者のニーズを反映させていきたい。

未来研究会は多くの参加者に支えられて2年目をスタートさせることができた。平成16年度は、文京区教育委員会の後援を得ることができ、現職教師の研修としての機能もより一層確かなものになりつつある。教師にとって、行政権からあてがわれたり、強制されたりして研修を行うことは本来のあり方ではない。教師の研修は、その個人の人間的な要求や園・地域の要求に根ざし、何よりもその自主性、主体性が保証されなければならない。今後、運営側と参加者との共同的取り組みをより一層推進していきながら、参加者一人一人にとって意味ある研修、また、共同研究のあり方を探っていきたいと思う。

付記

平成15年度の幼児教育未来研究会運営委員は次の通りである。

赤石元子、井口眞美（東京学芸大学附属幼稚園）池田延行、岩立京子、倉持清美、福元真由美（東京学芸大学）松井とし（お茶の水女子大学附属幼稚園）無藤隆（お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター）

注：本論文の分担は次の通りである。Ⅰ．無藤隆 Ⅱ．西坂小合百、森下葉子、青木聡子 Ⅲ．倉持清美 Ⅳ．岩立京子